

語彙を

新学習指導要領では、語彙指導の充実が求められています。語感を磨き、語彙を豊かにする授業づくりについて考えます。

豊かにする

授業



サンキュータツオ

1976年、東京都生まれ。漫才師・学者芸人。お笑いコンビ「米粒写経」として活躍するいっぽう、一橋大学・成城大学・早稲田大学にて非常勤講師を務め、外国人留学生への日本語教育も担当する。早稲田大学第一文学部卒業後、早稲田大学大学院文学研究科日本語日本文化専攻博士後期課程修了。文学修士。200冊を超える辞書を集集する辞書コレクター。著書に、『学校では教えてくれない! 国語辞典の遊び方』『ヘンな論文』（ともに角川学芸出版）など。

撮影・鈴木俊介

インタビュー サンキュータツオ

言葉が生まれる先端、それが国語の授業だ。

言葉の意味や使い方を知りたいときに、身近で頼りになる国語辞典。『学校では教えてくれない! 国語辞典の遊び方』の著者・サンキュータツオさんに、国語辞典の魅力、国語辞典を通して知る言葉のおもしろさについてうかがいました。

国語辞典は

もっとも身近な学術書



——200冊を超える辞書をコレクションされているとのことですが、どうして国語辞典に興味をもつようになったのですか。

実は僕、中高生の頃は、国語に苦手意識をもっていたんです。だから当時は、国語辞典の魅力なんて考えたこともなかったですね。

辞書にはまったのは、大人になってから。

たまたま、大学院の指導教官が、『集英社

国語辞典』編者の中村明先生だったんです。

それで、ゼミでは、さまざまな国語辞典を比較するというのを一年間かけてやった。

国語辞典なんて、どれもそう変わらないし、それほど掘り下げるものもないだろう。正直、初めはそんなふうに思っていました。でも、それが見事に覆された。

「この言葉が載っているのはどれか」「語釈はどう違うか」「用例が充実しているものはどれか」など、一年も比較し続ける

ことができるぐらい、国語辞典には見どころがたくさんあることを学びました。そして、出版社ごとに全く違う方針のもと編まれていることも。国語辞典は、編著者の言語観が表れた、もっとも身近な学術書なんだというのに気づいたんです。それからほとんどおもしろくなって、出版社や版が違うものを集めて、読み比べをして楽しむようになりました。

——普段、どんな楽しみ方をされているのですか。

僕が勝手に「ビッグ4」とよんでいるのが、『岩波国語辞典』『三省堂国語辞典』『新明解国語辞典』『明鏡国語辞典』の四冊です。戦後、多くの出版社からさまざまな辞書が



——さまざまな意味や使い方に意識を向けることは、言葉を使いこなすことにもつな

言葉を使いこなすために



——さまざまな意味や使い方に意識を向けることは、言葉を使いこなすことにもつな
きます。こんなやり方もあるんだと感心しました。「新しく知った言葉辞典」とか、ジャンルを限定して取り組んでもいいんじゃないかと思います。

——読み比べの他にも、教室で取り組みそうですね。
クラスでオリジナルの国語辞典を作るのもいいですね。以前、僕の本（『学校では教えてくれない！国語辞典の遊び方』）を読んでもくれた学校の先生が、クラスで作った国語辞典を送ってくれたことがあるんです。

——読み比べの他にも、教室で取り組みそうですね。
クラスでオリジナルの国語辞典を作るのもいいですね。以前、僕の本（『学校では教えてくれない！国語辞典の遊び方』）を読んでもくれた学校の先生が、クラスで作った国語辞典を送ってくれたことがあるんです。

——出版社によってそれほど編集方針が違うなんて、比較によってこそわかることですね。

言葉の意味や使い方に 正解はない



——出版社によってそれほど編集方針が違うなんて、比較によってこそわかることですね。
それはもう使われることがなくなった言葉と考えられます。どちらかというと、『岩波国語辞典』は、長く使われてきた「定番」の言葉を収録することを仕事としている辞書ですね。何が載っていて、何が載っていないかは、各辞書の編集方針が表れる重要な情報なんです。

発行されたなかで、淘汰の結果生き残ってきた、とても優秀な辞書たちです。これらについては、新しい版が出たらず、冒頭の凡例が書かれているところから読み、改訂された内容をつかみます。

それから、どの辞書にどんな言葉が入ったのか、どんな言葉がなくなったのかを調べる。例えば、『三省堂国語辞典』は他の三つに比べて、新語の収録に積極的なんです。だから、ここに新たに収録されたものは、今の「生きた言葉」であり、他の三つに収録されるようになったものは、定着した言葉といえる。逆に、なくなったものは、今はもう使われることがなくなった言葉と考えられます。どちらかというと、『岩波国語辞典』は、長く使われてきた「定番」の言葉を収録することを仕事としている辞書ですね。何が載っていて、何が載っていないかは、各辞書の編集方針が表れる重要な情報なんです。

そうなんです。ただ、学習用に作られた国語辞典だと、収録している言葉にそれほど大きな違いは出ないので、方針の違いは見えにくいかもしれませんね。だから、中学生が国語辞典のおもしろみに触れる機会というのは、実はそれほど多くない。そう考えると、「中学生向け」ではない、一般の国語辞典を使ってみるほうが、中学生にとっては学ぶことが多いのではないのでしょうか。

それから、僕もそうだったのですが、学校によっては、全員が同じ辞書を使っていることもありますね。それもちよつともったいないなと思います。みんな同じ辞書を使っていたとしても、できれば教室内に別の辞書が何冊か用意されていればいいですね。違う国語辞典を持った人が五人も集まれば、「どの辞書で、どの言葉を、どう説明しているか」を比べるだけで、言葉をめぐる話が一時間以上もできるんですから。

——国語辞典にもいろいろあるんだ、と知るだけでも言葉への関心が高まるかもしれませんね。

一つの国語辞典しか知らないと、「辞書に書かれていることが唯一の正解だ」と思ってしまうんですね。それは大人にも

がりそうですね。

そうですね。日本語には「お手洗い」「化粧室」「トイレ」「便所」「レストルーム」など、同じものを指す複数の言葉が存在するでしょう。辞書ではどれも同じように説明されているこれらの言葉を、適切に使い分けること。言葉を使いこなすには、そうした「運用の力」が必要であるといっている。そして、それを支えるのが、「伝えたこと」によって、選ぶ言葉が違ふんだ」という言語観だと、僕は考えています。

今、若者たちにとって身近なSNS上のディスコミュニケーションの多くは、相手が使った言葉の意味と、そこから自分が受け取った意味が食い違ふところから起きている。これは、知っている言葉の数が多いとか少ないとかの問題ではないですね。言葉の真意を読み取ることができていない、ということなんだと思うんです。

——その背景には何があるのでしょうか。

▼『新明解国語辞典 第七版』（三省堂）の「公僕」の項目。



言えること。今は、テレビのクイズ番組などを見ていると、『広辞苑』に書かれていることが、なんだって正しいと考える風潮があるでしょう。でも、そもそも言葉には、正しい意味、正しい使い方というものはない。『広辞苑』だって、ある方針のもとで編集されたものなんです。

言葉って、生きているもので、正解がないからこそ、おもしろいんですね。中学生の子どもたちには、ぜひそれを知ってもらいたいと思います。言葉の意味や使い方の正解を確かめるためではなく、言葉について自分で考えるきっかけとして、国語辞典を使ってもらいたいですね。

例えば、「公僕」という言葉があります。多くの国語辞典では、これを「公務員」とだけ説明しています。いっぽう、『新明解国語辞典 第七版』には、こんなふうに書かれている。「国民に奉仕する者としての公務員の称。（ただし実情は、理想とは程遠い）」（右ページ写真）。注目すべきは最後の一文です。これによって、「公僕」には皮肉めいたニュアンスがあつて、人に向かつて使うと、ばかにすることにもなるんだってということが、ちゃんとわかりますよね。

こうしたことを理解せずに、表面的な意味だけを見て言葉を使う。その言葉が使われた意図や文脈を考えずに表面的に受け止める。おそらく、そんなふうにしてディスコミュニケーションが発生しているのでしょう。実際のコミュニケーションの場で求められるのは、言葉をたくさん知っていることよりも、自分が知っている言葉のニュアンスをきちんと理解して使えること。

言葉って、生きているもの。
正解がないからこそ、おもしろい。



だから、言葉の数を増やすことばかりでなく、語感や運用にも注力した国語の授業が、これからの時代、ますます大切になってくるのではないのでしょうか。

——言葉の数については、運用に足る程度あればいいということでしょうか。

もちろん、最低限必要な言葉の数というのはあります。でも、色鉛筆にたとえるとして、64色とか100色とかは必要ない。20色もあれば、わりと多くのことが表現できます。「レモン色」がなければ黄色と白を、「紺色」がなければ青と黒を混ぜてみればいい。中学生にもなると10色ではさすがに足りないでしょうけど、20色ぐらいの中でうまくやりくりすることを知ってもらえたらと思います。

若者たちがそうやって言葉を使うようになると、とても興味深い現象を目にすることがあります。僕は大学一年生に教える機会があるのですが、彼らは最近、「つらい」を「つらみ」と言ったり、「うれしい」を「うれしみ」と言ったりして名詞化しているんです。教育的には眉をひそめる表現かもしれませんが、これこそ「生きた言葉」だといえます。

——これまでにない新しい使い方ですね。そもそも、「悲しい」という形容詞とは別に、「悲しむ」という動詞の名詞形「悲しみ」があった。おそらく「悲しみ」だって、使われ始めたときにはけしからんと言われていたかもしれないけれど、今は違和感なく受け入れられて、みんなが使っていますよね。だから、僕は、こういう現象を、新しい言葉が生まれるドラマチックな瞬間と捉えています。

規範を教えることはもちろん大事です。でも、規範から外れるものを否定し続けることは、言葉に正しい意味や使い方があると信じることに同じです。それは言語観の硬直にも結び付くでしょう。言葉って、もっと自由なものだと思うんです。言葉を学ぶ国語の授業では、新しい言葉が生まれる先端にみんなが立っているんだという意識のもと、言葉の自由さや表現のおもしろみに触れることが大事なんじゃないでしょうか。それはきっと、言葉を使いこなすことにもつながるはずですよ。

「生きた言葉」を体に入れて

——国語辞典を使って学習をしている中学生に向けて、メッセージをお願いします。

まずいちばん伝えたいのは、「言葉は生き物である」ということ。中学生って、「生きた言葉」の中で、生活に必要な言葉を身につけていく時期だと思います。言葉に正解はないことを知り、「生きた言葉」をしつかりと体に入れてもらいたいです。

それから、今持っている色鉛筆は10色ほどかもしれないけれど、これから絵を描いていくためには、20色ぐらいまでは増やしてほしいですね。ただ、「緑」は持つていてほしいけれど、それを超えて、「うぐいす色」や「ビリジアン」みたいな細かい緑の違いまではいらなないと思っています。

——先生方に伝えたいことはありますか。

「言葉は生き物である」という前提で、子どもたちに教えてもらえたらいいなと思います。そして、ぜひ、国語辞典を使って、言葉の意味を考えたり、説明を書いたりする授業を試してみてもらえたらうれしいです。僕は、国語辞典の魅力や楽しみ方をおみ砕いて皆さんにお伝えするのが仕事だと思っています。もし必要であれば、直接、授業をしにいきますよ(笑)。

——きっと楽しい授業になりますね。今日は、ありがとうございました。

サンキョータツオ

の おすすめ国語辞典

用途によって使い分けられるよう、「辞書は二冊持て!」と、いつも主張しています。

中学生が一冊目に持つのにおすすめのものが、『学研 現代新国語辞典 改訂第六版』。もちろん、教科書に載っている言葉はしっかり押さえています。そのうえ、「類語と表現」という囲みが随所にあって、言い換え可能な類義語や関連語・表現を紹介してくれています。「雨」を調べれば「春雨」「時雨」などが出てくるので、微妙なニュアンスの違いを見つけるときに便利です。

二冊目としては、『ベネッセ 表現読解国語辞典』。これは、言葉の運用に特化した辞書だと思っています。語釈は簡潔だけど、どんなときにどう使うかについてはとても丁寧に説明してくれているんです。例えば、「もつとびつたり」という囲み。考えや気持ちを表す言葉について、細かいニュアンスごとに類義表現を紹介していて、よりぴったりなものを探すことができます。「心配する」を言い換えるにも、何を心配しているかで、選ぶ言葉は違います。表現するときに特に便利な辞書です。

せっかくの機会なので、アプリ版『大辞林』もご紹介します。このアプリのすばらしいところは、五十音だけでなく、テーマごとにどんどん下位語に遡りながら言葉を探ることができること。紙の辞書をランダムに開くのと違う、自分の興味に沿った新しい言葉との出会いをもたらしてくれます。これは、紙にはできないことです。



学研 現代新国語辞典 改訂第六版

金田一春彦
金田一秀穂 編

学研
3,000 円 + 税



ベネッセ 表現読解国語辞典

沖森卓也
中村幸弘 編

ベネッセコーポレーション
2,800 円 + 税



iPhone・iPad
アプリケーション
大辞林
物書堂 / 2,600 円

国語辞典アプリのススメ